

【原 著】

## 看護師の漢方医学への関心度の高さに関連する因子の検討

～看護師に対する漢方教育の拡充に必要なこととは？～

### The Factors Affecting Nurse's Interests in Kampo Medicine

～What is Necessary to Spread Education of Kampo Medicine to Nurses?～

宮田潤子<sup>1)2)</sup> 橋口暢子<sup>1)</sup> 金岡麻希<sup>3)</sup> 濱田正美<sup>4)</sup> 貝沼茂三郎<sup>5)</sup> 樗木晶子<sup>6)</sup>

1)九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野、2)九州大学大学院医学研究院小児外科学分野、3)宮崎大学医学部看護学科

4)福岡県看護協会、5)富山大学医学部和漢診療学講座、6)福岡看護大学看護学科

## 抄 録

看護師の漢方医学への関心度の高さに関連する因子を検討し、看護師に対する漢方教育拡充のために必要なことを明らかにすることを目的とした。

2014年9～10月、A大学病院勤務の全看護師1203名を対象として無記名自記式質問票調査を行った。調査では(1)属性、(2)現在の体調について、(3)漢方医学に対する関心・認識について、(4)健康増進ライフスタイルについて質問した。

アンケート回収率は90%、有効回答率は74%であった。漢方医学への関心度の高い群では、女性、外来所属、管理職、夜勤がない、同居家族がいる、子どもがいる、の割合が高く、看護経験年数が高い、体の不調に関する自覚症状の数が多いという特徴があった。ロジスティック回帰分析の結果、漢方医学への関心度の高さには、女性、経験年数が長いこと、同居家族がいることが関連していた。

看護師の漢方医学への関心は自身や家族の体調など身近なところから始まり、業務上の経験によりさらに関心度が高まるものと考えられた。看護師が自身のキャリア形成のなかで、解決困難な問題に対する漢方医学による成功体験がさらに学びを深めるきっかけになると考える。

キーワード：漢方医学，教育，看護師，関心度，健康増進

## 緒 言

漢方医学は、中国より伝来し日本で独自の発展を遂げた東洋医学の一つである。西洋医学を根幹として発展してきた本邦において、近年、漢方医学への関心が高まっている<sup>1)2)</sup>。西洋医学を中心とする現代の医学界において、漢方医学への関心が高まった理由の一つとして、漢方医学では西洋医学とは異なるアプローチにより、西洋医学による治療では改善が難しい慢性疾患や病態に対する効果が認められる点が挙げられる<sup>3)</sup>。現代医学による手術、抗がん剤、放射線治療、抗菌薬、ステロ

イドホルモン剤等の治療が発展し、その有効性が認められる一方、後遺症や副作用が問題となることもある<sup>4)7)</sup>。疾病の原因によっては西洋医学的に治療が困難であり、主たる疾患は軽快したものの、新たな原因不明の心身の不調が残り続けることもある<sup>8)9)</sup>。漢方医学ではそのような原因不明の心身の不調の症状だけではなく、「人」全体を診ることによって、個別化医療あるいはテーラーメイド型の治療が可能である<sup>10)</sup>。また、この「人」全体を診る漢方医学的な考え方は、様々なストレスに直面しやすい現代社会において、非常に有効な治療

戦略となりうる<sup>11)12)</sup>。

漢方薬を使用する医師が増えることで、看護師が漢方薬に関わる機会は必然的に増加する。このため、看護師が、患者が服用している薬の作用や効果効能を理解し、出現しうる副作用に関する知識を習得しておくことは、西洋薬同様、漢方薬に関しても期待される。2017年には看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおいて、和漢薬の知識習得が求められるようになった。これにより全国の大学の看護学教育において漢方医学教育の導入推進が図られてきている。それに先立って、我々は2014年よりA大学病院の看護職に対する漢方医学教育を積極的に推進して毎年座学と四診演習のセミナーを開催してきた。看護職が漢方医学を習得することにより、漢方医学の知識と、その特有の考え方を患者のケアおよび自身のケアに活用し、よりよい医療の提供に繋げることを本セミナーの目標としている。看護師に対する漢方教育を実践するにあたり、看護師の漢方医学に対する学習の動機づけから習熟度の向上に向けて、より適切なロードマップを描き、先を見据えた教育プランの設定が望ましいと考える。そのために看護師の漢方医学に対する関心度や認識の現状と、関心度に影響する因子を明らかにすることが必要と考える。しかしながら、看護師に対する漢方教育の意義<sup>13)</sup>や漢方教育の現状<sup>14)</sup>に関する報告はあるが、漢方医学への関心度に影響する因子を明らかにした報告はない。本研究ではこの点を明らかにし、看護師に対する漢方教育の適切な方向性を見出すことを目的として調査を行った。

## 研究方法

### 1. 研究デザイン

研究デザインは横断的調査研究である。

### 2. 対象

福岡県内のA大学病院に勤務する全看護師を対象とした。

### 3. 調査期間

アンケート調査を、当該施設での看護師を対象とした漢方医学教育を開始する前である、2014(平成26)年9月から10月に実施した。

### 4. 調査方法

対象施設の看護部管理者に調査の目的と内容を説明し、承諾を得た後、全看護師にアンケート調査用紙を配布した。アンケートは無記名自記式質問紙A4版両面印刷3枚(6頁)を用いた。

### 5. 調査内容

#### 1) 基本属性

年齢、性別、看護経験年数、所属部署、役職、勤務形態、同居家族の有無、子どもの有無、現在の婚姻状況について尋ねた。

#### 2) 体の不調な症状とそれが起こる頻度

中野らの調査項目をもとに、23項目の症状について体調不良が起こる頻度を調査した<sup>15)</sup>。頻度は、①いつもある、②時々ある、③どちらとも言えない、④あまりない、⑤全くない、の5段階リッカートスケールで回答を得た。

#### 3) 漢方医学に対する関心・認識

漢方医学に対する関心や自分自身への使用、漢方医学に関する教育歴等、9項目について調査した。なお、それぞれの項目は①非常にある、②少しある、③どちらでもない、④あまりない、⑤全くない、の5段階リッカートスケールで回答を得た。

#### 4) 健康増進ライフスタイル

日本語版健康増進ライフスタイルプロフィールII(Health-Promoting Lifestyle Profile II, HPLP II)を用いた<sup>16)</sup>。HPLPは個人の日常生活行動とライフスタイルを評価し、測定するためにWalkerらが1985年に開発したものであり<sup>17)</sup>、1996年にその改良版が発表された。日本語版HPLP IIは2000年に作成され、日本人の健康増進ライフスタイルの構成要素を解析、あるいは他の民族や国の人口集団のデータと比較するために有用な測定ツールであることが認められている<sup>16)</sup>。この調査票は52項目から成り、「健康意識」9項目、「精神成長」9項目、「身体活動」8項目、「人間関係」9項目、「栄養」9項目、「ストレス管理」8項目の6つの下位尺度から構成されている。点数が高いほど、より良好なライフスタイルであることを表す。なお、本調査においては日本語版HPLP II開発者の魏氏に許可を得て使用した。

### 6. 分析方法

#### 1) 得られたデータの正規性の検定

得られたデータのうち連続変数はヒストグラムで正規分布を確認した。数値は平均値±標準誤差で表記した。ただし、回答者属性の年齢と看護経験年数は平均値±標準偏差で表記した。

## 2) 「漢方医学への関心度」と他の質問項目との関連性について

漢方医学に対する関心・認識のなかでも直接的に漢方医学に対する関心度をたずねている質問項目である「漢方医学に関心がありますか」に対する回答を「漢方医学への関心度」と定義し、「非常にある」「少しある」の回答を「関心あり」とまとめ、「あまりない」「全くない」の回答を「関心なし」とし、さらに、「漢方医学に関心がありますか」以外の質問項目への回答は「非常にある」「少しある」を「あり」群、「あまりない」「全くない」を「なし」群として、二値化して分析を行った。「漢方医学への関心度」と基本属性調査項目との関連性、「漢方医学に対する関心・認識」に関する他の質問項目との関連性、「体の不調な症状の数」との関連性、HPLP II平均点数との関連性は、 $\chi^2$  検定あるいは  $t$  検定を用いて分析した。

## 3) 体の不調な症状とそれが起こる頻度の回答

「いつもある」「時々ある」と回答したものを有症状と定義した。さらに、有症状の項目の数を「体の不調な症状の数」と定義した。

## 4) 漢方医学への関心度と基本属性調査項目との関連

「漢方医学への関心度」に対する回答を関心なし=0、関心あり=1 とし、二値変数を目的変数とした。基本属性調査項目との関連を  $\chi^2$  検定および  $t$  検定で単変量解析した後、性別（男性=0、女性=1）、所属部署（内科系病棟=0、外科系病棟=1、外来=2、その他=3）、勤務形態（夜勤なし=0、夜勤あり=1）、同居家族の有無（同居家族なし=0、同居家族あり=1）、婚姻状況の有無（婚姻状況なし=0、婚姻状況あり=1）を説明変数としてロジスティック回帰分析（AIC を用いたステップワイズ法）を用いた。

## 5) 分析には EZR<sup>18)</sup> の統計ソフトを使用し、危険率 5% 未満を有意水準とした。

## 7. 倫理的配慮

本研究は九州大学医系地区部局臨床研究倫理審

査委員会の許可（許可番号：29-202）を得て実施した。アンケート配布時に調査目的、所用時間について記載した依頼文を配布した。アンケートは無記名で、本調査以外には使用しないことも説明するとともに、アンケート返送を以て研究協力に同意するとみなした。

## 結 果

福岡県内 A 大学病院全看護師 1203 人にアンケート用紙を配布し、1085 人（90.2%）から回収することができた。最終的な有効回答は 887 人（73.7%）であった。

データは一部正規分布していない項目があり、本来であればノンパラメトリック検定を用いることが基本であるが、対象者の人数が 887 人であることから、今回はパラメトリック検定で分析を行った。

回答者の属性を表 1 に示す。対象の性別はほとんどを女性（93.9%）が占めていた。平均年齢は平均 31.8±8.4 歳、看護経験年数は平均 9.3±8.4 年であった。所属部署は外科系病棟が 40.9%、内科系病棟が 29.4%と、病棟を担当する対象が 7 割を占めていた。役職はスタッフ（非管理職）が 88.7%とほとんどを占めており、勤務形態も同様に夜勤ありが 86.7%を占めていた。社会的背景の詳細では、同居家族、婚姻状況、子どもの「なし」の回答割合は、それぞれ、60%、75.3%、81.3%と過半数を占めた。

（表1）回答者属性

性別 (人(%))	女性 833 (93.9), 男性 54 (6.1)
年齢 (歳)	平均 31.8±8.4
看護経験年数(年)	平均 9.3±8.4
所属部署 (%)	外科系病棟 40.9, 内科系病棟 29.4 外来 8.5, その他 21.2
役職 (%)	スタッフ 88.7, 管理職 11.3
勤務形態 (%)	夜勤あり 86.7, 夜勤なし 13.3
同居家族 (%)	なし 60.0, あり 40.0
婚姻状況 (%)	なし 75.3, あり 24.7
子どもの有無 (%)	なし 81.3, あり 18.7

「漢方医学への関心度」と「属性」の関連について表 2 に示す。漢方医学への関心度の高さに関連性のあった要素は、性別が「女性」（ $p=0.003$ ）、

看護経験年数が「高い」( $p = 0.003$ )、所属部署が「外来」( $p = 0.039$ )、役職が「管理職」( $p = 0.021$ )、勤務形態が「夜勤なし」( $p = 0.008$ )であった。社会的背景については、「同居家族あり」( $p = 0.001$ )、「子どもあり」( $p = 0.009$ )で関心度が高かった。

(表2) 漢方医学への関心度と属性との関連

		漢方医学への関心		p値
		あり (人(%))	なし (人(%))	
性別	女性	453 (51.1)	186 (21.0)	.002
	男性	18 (2.0)	20 (2.3)	
所属部署	内科系	132 (14.9)	63 (7.1)	.042
	外科系	201 (22.7)	81 (9.1)	
	外来	51 (5.7)	11 (1.2)	
	その他	87 (9.8)	51 (5.7)	
役職	管理職	66 (7.4)	16 (1.8)	.022
	スタッフ	405 (45.7)	190 (21.4)	
夜勤	あり	393 (44.3)	188 (21.2)	.007
	なし	78 (8.8)	18 (2.0)	
同居家族	あり	210 (23.7)	64 (7.2)	.001
	なし	261 (29.4)	142 (16.0)	
婚姻状況	あり	131 (14.8)	47 (5.3)	.185
	なし	340 (38.3)	159 (17.9)	
子ども	あり	108 (12.2)	29 (3.3)	.008
	なし	363 (40.9)	177 (20.0)	

( $\chi^2$ 検定)

	漢方医学への関心		p値
	あり	なし	
看護経験年数(年)	10.63±0.43	7.95±0.47	<.001

(t検定)

(表3) 漢方医学への関心度の関連因子に関するロジスティック回帰分析

独立変数	オッズ比	95%信頼区間	Z値	p値	VIF
性別	2.610	(1.270-5.40)	2.595	.009	1.21
看護経験年数	1.030	(1.010-1.06)	2.686	.007	1.79
所属部署	0.878	(0.744-1.04)	-1.532	.125	1.14
勤務形態	0.555	(0.297-1.04)	-1.847	.065	1.33
同居家族の有無	2.280	(1.350-3.86)	3.066	.002	2.20
婚姻状況の有無	0.590	(0.317-1.10)	-1.669	.095	2.99

VIF : variance inflation factor (分散拡大係数)

解析方法 : 二値変数に対するロジスティック回帰分析 (AICを用いたステップワイズ法)

漢方医学への関心度と基本属性の回答項目との関連の多変量解析結果を表3に示す。「性別」「看護経験年数」「同居家族の有無」が漢方医学への関心度と特に関連のある因子として抽出された。以上より、「女性」「看護経験年数が高い」「同居家族あり」が漢方医学への関心度の高い群の背景であった。

回答者一人あたりの「体の不調な症状の数」は、女性看護師が平均  $8.81 \pm 0.12$  個 (月経関連症状2項目含む)、男性看護師が  $6.26 \pm 0.59$  個 (月経関連症状2項目含まず) であった。女性看護師で「関心あり」群が  $9.06 \pm 0.16$  個、「関心なし」群が  $8.27 \pm 0.25$  個で「関心あり」群が有意に「体の不調な症状の数」が多かった ( $p = 0.009$ )。男性看護師でも「関心あり」群が  $6.78 \pm 0.62$  個、「関心なし」群が  $4.1 \pm 0.67$  個で「関心あり」群が有意に「体の不調な症状の数」が多かった ( $p = 0.006$ ) (表4)。

(表4) 「漢方医学への関心度」と「体の不調な症状の数」との関連

		漢方医学への関心		p値
		あり	なし	
「体の不調な症状の数」(個)	女性	$9.06 \pm 0.16$	$8.27 \pm 0.25$	0.009
	男性	$6.78 \pm 0.62$	$4.1 \pm 0.67$	0.006

(t検定)

(表5) 「漢方医学への関心度」と「漢方医学に対する関心・認識」との関連

「漢方医学に対する関心・認識」に関する質問項目		漢方医学への関心		p値
		あり (人(%))	なし (人(%))	
漢方を自分自身が使用したことはありますか	あり	292 (32.9)	88 (9.9)	<0.001
	なし	169 (19.1)	115 (13.0)	
学生時代に漢方医学についての講義等を受けたことはありますか	あり	37 (4.2)	17 (1.9)	0.927
	なし	415 (46.8)	185 (20.9)	
就職後に漢方医学についての講義等を受けたことはありますか	あり	35 (3.9)	2 (0.2)	0.001
	なし	429 (48.4)	203 (22.9)	
患者さんから漢方に関する質問を受けたことはありますか	あり	170 (19.2)	40 (4.5)	<0.001
	なし	275 (31.0)	159 (17.9)	
現在の医療には漢方医学が必要であると思いますか	あり	372 (41.9)	63 (7.1)	<0.001
	なし	4 (0.5)	33 (3.7)	
看護師に漢方医学に関する知識は必要だと思いますか	あり	401 (45.2)	110 (12.4)	<0.001
	なし	10 (1.1)	29 (3.3)	
漢方は「科学的」であると思いますか	あり	176 (19.8)	21 (2.4)	<0.001
	なし	72 (8.1)	80 (9.0)	
看護師を対象とした漢方医学セミナーに参加したいですか	あり	363 (40.9)	27 (3.0)	<0.001
	なし	19 (2.1)	110 (12.4)	

( $\chi^2$ 検定)

「漢方医学への関心度」と「漢方医学に対する関心・認識」に関する他の質問項目との関係については、「学生時代に漢方医学についての講義等を受けたことはありますか」( $p = 0.927$ )以外の回答では、「関心あり」群において「あり」群の回答が有意に多かった ( $p < 0.001$ ) (表 5)。

HPLP II総得点は平均  $128.7 \pm 15.3$ 、男女別では女性看護師で  $128.6 \pm 15.4$ 、男性看護師で  $127.4 \pm 14.4$  であった。男女のスコア総得点は  $t$  検定で有意差を認めなかった ( $p = 0.400$ ) (図表なし)。HPLP IIスコアの平均値を表 6 に示す。下位尺度項目「人間関係」「ストレス管理」がそれぞれ  $2.98 \pm 0.01$ 、 $2.65 \pm 0.01$  と高値を示した一方で、「身体活動」は  $1.81 \pm 0.02$  と低値であった。「漢方医学への関心度」の「あり」「なし」の群間では、HPLP IIの全体平均点数および下位尺度項目平均点数は、全員、女性看護師、男性看護師のいずれにおいても有意差は認められなかった (表 6)。

(表6) HPLPII平均点数および漢方医学への関心度との関連

	全員 (男女込み)				女性看護師				男性看護師			
	漢方医学への関心				漢方医学への関心				漢方医学への関心			
	全体	あり	なし	p値	全体	あり	なし	p値	全体	あり	なし	p値
総合	2.48±0.08	2.48±0.01	2.48±0.02	.97	2.47±0.01	2.48±0.01	2.48±0.02	.98	2.51±0.04	2.51±0.06	2.50±0.07	.85
健康意識	2.45±0.01	2.46±0.02	2.46±0.03	.86	2.46±0.01	2.46±0.02	2.48±0.03	.61	2.33±0.06	2.33±0.12	2.31±0.11	.92
精神成長	2.48±0.02	2.49±0.02	2.48±0.03	.86	2.47±0.02	2.48±0.02	2.48±0.04	.92	2.58±0.06	2.65±0.09	2.52±0.10	.34
身体活動	1.81±0.02	1.80±0.03	1.82±0.04	.63	1.80±0.02	1.80±0.03	1.80±0.04	.97	1.86±0.08	1.73±0.15	1.99±0.15	.23
人間関係	2.98±0.01	2.98±0.02	2.98±0.03	.78	2.97±0.01	2.98±0.02	2.97±0.03	.83	3.03±0.05	3.09±0.09	3.00±0.10	.50
栄養	2.44±0.01	2.45±0.02	2.41±0.03	.27	2.43±0.01	2.45±0.02	2.41±0.03	.26	2.50±0.06	2.49±0.12	2.44±0.09	.74
ストレス管理	2.65±0.01	2.64±0.02	2.68±0.03	.32	2.65±0.01	2.64±0.02	2.68±0.03	.30	2.70±0.06	2.73±0.09	2.68±0.11	.74

( $t$  検定)

## 考 察

本調査は高い回収率と有効回答率が得られており、A 大学病院看護師の現状を適切に反映する結果が得られていると考える。

今回の回答者のうち、学生時代や就職後に漢方医学を学んだことがある看護師はいずれも少数であり、漢方医学を学習する機会に触れていないものが圧倒的に多いという現状であった。この結果は、看護基礎教育において漢方医療教育を導入している教育機関が、469 校中 17 校 (3.6%) であったという中野ら<sup>7)</sup>の報告を反映しており、看護教育における漢方医学教育が普及してこなかったことを裏付ける結果となった。その一方で、「現在の医療には漢方医学が必要」と考える回答が 60.5%、「看護師に漢方医学に関する知識は必要」と考える回答が 74.0%であったことは、自身が教育を受ける機会はなかった一方で、医療現場での経験上、漢方医学教育の必要性を実感していることを反映していると考えられる。

竹森ら<sup>19)</sup>は漢方医学の研修を受けた看護職者へのインタビュー研究の報告で、看護学生時の学習では、国家試験に出る内容が優先されることや、漢方薬の説明を読んでも患者の状態を結びつけにくいとする結果を提示している。学生時代に学習

機会のなかった看護師らは、医療現場において、漢方医学がどのようなものかを知らない、漢方薬の処方意図や効果がわからない、といった状況であり、わからないものをそのままにしている状況にある、という語りがあったことも明らかにしている。これに対して、漢方の自然治癒力に働きかけ、患者を全体でみる、生活を整える、という考え方は看護がもつ見方・役割と共通しており、漢方医学を学ぶことで、看護の視点を再認識する機会になること、観察力・情報収集力などの実践力を高めることに役立つであろうと竹森ら<sup>19)</sup>は述べている。江口ら<sup>20)</sup>は漢方研修受講後の看護職者に対する意識調査を報告で、96.4%の回答者が、看護職は漢方医学を学習する必要がある、また漢方医学についてもっと学びたいと希望したと報告している。漢方医学を学習する機会が得られた看護師らは、看護師としての経験があるからこそ、漢方医学の知識を深めることで、自己研鑽につながる親和性を実感し、漢方医学に対する関心度が高まっていることが考えられる。

我々の調査結果においても、「漢方医学への関心度」は学生時代の講義受講歴との関連性は低く、性別、看護経験年数、同居家族の有無との関連があり、「家族を持つ看護経験年数の高い女性看護師」

が漢方医学への関心度が最も高い集団であった。

経験のある看護師ほど漢方医学への関心度が高まることは、「実践経験のある看護師」が漢方医学を学習することの有用性に関する竹森ら<sup>19)</sup>の主張を裏付けるものであると考える。我々の調査結果のうち、「漢方医学への関心度」と「患者さんから漢方に関する質問を受けたことはありますか」の質問に対する回答結果には関連を認めており、業務上において漢方と関わる経験が積み重なることで関心度が高まることを示している。

看護経験年数と年齢には多重共線性が発生したため、年齢が高いことも漢方医学への関心度の高さを関連すると考える。年齢を重ねることにより体力の低下や健康への不安も増す。このことはより健康を維持するための意識も高まる。大野らの報告によると、青年期女性への調査で、「健康に興味・関心がある」と回答したものは52.6%であった<sup>21)</sup>のに対し、壮年期女性では76.7%であった<sup>22)</sup>。このため、様々な体調不良に適応する漢方治療への関心が高まることが考えられる。

「漢方医学への関心度」の高さには性別も影響しており、女性での関心度が有意に高かった。これは漢方や伝統的医療の治療を受ける患者は女性が男性の約2倍である、という報告が複数確認できる<sup>23)・25)</sup>。金ら<sup>23)</sup>と福田ら<sup>24)</sup>は女性特有の疾患が漢方治療の対象となるためであろう、と考察している。一方、西村ら<sup>25)</sup>は女性患者が多い理由として、女性の健康や疾患に対する関心の高さの他、目にする女性雑誌には健康や疾患に対する特集記事が多いことを上げている。青年期あるいは壮年期における健康への関心の程度に関する研究<sup>21)・22)</sup>があるが、これらによると青年期、壮年期いずれにおいても女性のほうが男性より健康への関心は高い。元来、女性は男性より健康への関心が高く、その結果、様々な媒体から健康に関する情報を広く収集し、健康に良さそうなものへ積極的に関心を払っている可能性が考えられる。その傾向が今回の「漢方医学への関心度」の性別差に繋がった可能性がある。

また、「漢方医学への関心度」の回答結果は「看護師に漢方医学に関する知識は必要だと思いますか」「現在の医療には漢方医学が必要であると思

いますか」「漢方は科学的であると思いますか」の回答結果と関連があった。つまり、「漢方医学への関心度」が高い者は、「看護師に漢方医学に関する知識は必要」「現代医療には漢方医学が必要」「漢方は科学的である」と考えているということになる。この結果から、看護師のための漢方医学教育においては、看護業務や現代医学における漢方医学の有用性や活用方法に関する内容や、漢方医学の科学的根拠を提示する内容にすることは看護師に対する漢方医学教育拡充のために必要なことであると考えられる。

漢方医学を学習する動機や学習の効果が、看護師自身の健康管理や自身のケアと繋がる可能性については、「漢方医学への関心度」が、質問項目の「漢方を自分自身が使用したことはありますか」（自分自身への使用経験）と関連があった点、および、「漢方医学への関心度」の高い集団が「家族を持つ看護経験年数の高い女性看護師」であることを考えると、自分自身や家族の体調管理が漢方医学への関心度を高める動機づけになっていることがうかがえる。これは、「漢方医学への関心度」の「関心あり」群で女性看護師、男性看護師ともに「体の不調な症状の数」が有意に多かった点とその根拠と言えるが、その一方で、「漢方医学への関心度」とHPLPⅡ平均点数との関連については、「漢方医学への関心度」の有無と、HPLPⅡの全体平均点数および下位尺度項目平均点数各々との関連を認めなかった点から、漢方医学は自身の健康管理意識まで深く浸透しているわけではない可能性が示唆される。すなわち、自分自身の体調が悪いと漢方が効くのではないかと考えるが、自身の積極的な健康管理に活かす思考や行動との関連はいまだ希薄である可能性がある。

A 大学病院では2014年本アンケート調査の後から院内看護師に対する漢方セミナーを開催している。セミナーでは、漢方医学の基礎的な知識を学ぶ講義後に、合計4回の四診の演習トレーニングを開催している。演習トレーニングでは、看護師役と患者役それぞれを全員が担当し、四診のスキルトレーニングを行い、漢方医学的思考過程の修得を目指している。このなかで、自分自身の健康状態を漢方医学的に振り返ることは漢方医学

への興味や学びを深めるよい動機付けになると考えられる。また、本セミナーにおいては、漢方医学的思考を看護ケアに転換していくことも到達すべき目標の一つに掲げている。実際の症例を提示し、陰陽、虚实、気血水などの問題点を抽出し、当該症例において有効な看護ケアとは何か、という問いへの答えをグループワークのなかで見出していく。患者に近い立場で患者の思いを傾聴し、患者に触れる機会も多く、患者の環境整備を行う看護師が漢方医学的思考を習得することは、患者の体調変化の早期発見や、よりよい療養環境を作り出すために極めて有用であると考え（竹森<sup>19)</sup>、寺澤<sup>20)</sup>）。また、学生時代の講義聴講経験がなくても、看護師としてのキャリア途中から関心を高めて学ぶことができる点は、医師における漢方専門医のキャリア形成とも類似していると考え。医師が漢方専門医を取得するためには基本領域の専門医を取得していることが条件となる。漢方医である小川<sup>21)</sup>は自身の漢方キャリアについて、小児外科医としてのキャリアを積み上げるなかで、西洋医学では治療できない疾患や病態に対する漢方治療の有用性に直面したことが漢方医としてのキャリアを踏み出すきっかけであったと述べている。看護師においても自身のキャリア形成のなかで、解決困難な問題に対する漢方医学による成功体験がさらに学びを深めるきっかけになると考える。

### 本研究の限界

本研究においては、単施設に限定したアンケート調査であり、大学病院という特殊な医療施設における漢方医学の認識度の影響を反映した結果となっている点は否めない。看護師への卒前あるいは卒後教育における漢方医学教育の定着を図るためには、種々の教育環境、労働環境、あるいは様々な漢方医学の認知度の多施設における調査結果を検討することが望ましいと考える。また、当該施設では10年間漢方セミナーを継続しているので、その効果を検証するためにも再調査を行い、10年前の漢方医学に対する認識状況と比較することを今後の課題としたい。

### 結 語

看護師の漢方医学への関心度の高さは自身や家族の健康管理に関連した要素の他、看護師としてのキャリア形成の過程での経験が関連していることが示唆された。看護師に対する漢方教育の拡充に必要なことは、自身や身近なものへの関心から、徐々に業務上への応用へと広げていき、さらに漢方医学を熟知した看護師養成のためには、漢方専門医養成の過程と同様に、看護職業業務上における解決困難な問題に対して、漢方医学的思考を用いたプランを考案して解決に至るなどの成功体験を積み上げることやその共有が有用であろうと考える。

本論文に関連し、開示すべき利益相反 (COI) はない

### 引用文献

- 1) 窪田正幸, 八木実: 日本小児外科漢方研究会参加施設・会員における漢方薬使用状況調査 日本小児外科漢方研究会第21回研究会アンケート報告. 日小外会誌 54, 130-135, 2018
- 2) 千里直之, 海老澤良昭, 河野透: 外科領域における漢方 Kampo の意義と役割. 外科治療 102, 299-306, 2010
- 3) 佐藤広康: 奈良県立医科大学における東洋医学に対する意識調査. 卒後3~5年医師へのアンケート. 日東医会誌, 59, 821-828, 2008
- 4) 元雄良治: 【産婦人科漢方医学-基礎と臨床のエビデンス-】 臨床研究における漢方のエビデンス がん治療における症状緩和のための漢方. 産婦人科の実際, 72, 293-298, 2023
- 5) 若月幸平, 三谷和男: 【臨床医が知っておくべき漢方治療-現場で役立つ漢方処方と運用法】 外科領域における漢方処方の活用法と実際. カレントセラピー, 41, 723-726, 2023
- 6) 大野修嗣: 膠原病に対する漢方治療の実際. 日本東洋医学系物理療法学会誌, 48, 1-5, 2023
- 7) 内菌明裕: 【耳鼻咽喉科と漢方薬-最新の知見-】 乳幼児・子どもに対する耳鼻咽喉科領域での漢方の有用性. ENTONI, 229, 84-92, 2019
- 8) R Sugimine, Y Kikukawa, D Kurihara, et al :

- Kampo medicine prescriptions for hospitalized patients in Tohoku University Hospital. *Tradit Kampo Med*, 8, 221-228, 2021
- 9) 寺澤捷年, 小林亨, 隅越誠, 他: 苓桂甘藶湯が劇的に奏功した白内障術後羞明感の一症例. *日東医誌*, 64, 184-187, 2013
  - 10) 間宮敬子: 【緩和医療の今】症状緩和の今 漢方薬. *ペインクリニック*, 36, 403-411, 2015
  - 11) 平田道彦: 【コロナ禍での漢方の役割-メンタルヘルス維持の重要性-】デジタルストレス(肩こり・頰椎症など)と漢方. *Progress in Medicine*, 41, 2021
  - 12) 蔭山充: 【現代女性を取り巻く社会環境の変化への対応-令和時代の女性への漢方療法-】働く女性をサポートする漢方 女性のストレスと漢方. *Progress in medicine*, 39, 1091-1094, 2019
  - 13) 丹村敏則: 病棟看護師に対する漢方教育の意義と必要性 急性期病棟で漢方薬治療が著効した 10 症例からの検討. *漢方医学*, 38, 67-71, 2014
  - 14) 中野榮子, 安酸史子, 山住康恵, 他: 看護基礎教育における漢方医療教育の実態. *福岡県立大学看護学研究紀要*, 10, 65-71, 2013
  - 15) 中野榮子, 安酸史子, 佐藤香代, 他: 東洋医療に関する日本と韓国の看護学生の意識調査. *福岡県立大学看護学研究紀要*, 8, 27-35, 2011
  - 16) 魏長年, 米満弘之, 原田幸一: 日本語版健康増進ライフスタイルプロフィール. *日衛誌*, 54, 514-521, 2000
  - 17) Walker SN, Sechrist KR, Pender NJ: The health-promoting lifestyle profile: Development and psychometric characteristics. *Nurs Res*, 36, 76-81, 1987
  - 18) Y Kanda: Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. *Bone Marrow Transplant*, 48, 452-458, 2013
  - 19) 竹森志穂, 江口優子, 吉田千文, 他: 漢方医学に関する看護師の生涯教育の検討. *聖路加看護学会誌*, 19, 54-60, 2016
  - 20) 江口優子, 竹森志穂, 吉田千文, 他: 看護職の漢方医学に関する認識と学習ニーズ. *聖路加看護学会誌*, 20, 19-26, 2016
  - 21) 大野佳美, 大坪芳江, 井澤美佐代, 他: 青年期男女の健康観と食生活に関する研究. *日本食生活学会誌*, 14, 177-184, 2003
  - 22) 大野佳美, 井澤美佐代, 大坪芳江: 40 歳代および50 歳代男女の健康および食生活に対する意識とその関連性. *日本食生活学会誌*, 15, 84-91, 2004
  - 23) 金成俊, 中村恵子, 緒方千秋, 他: 北里研究所東洋医学総合研究所における初診患者の解析と医療への活用. *日東医誌*, 56, 287-293, 2005
  - 24) 福田早苗, 渡邊映理, 小野直哉, 他: 現代西洋医学以外の伝統的医療・治療の使用と健康問題に関する実態調査. *日本公衆衛生雑誌*, 53, 293-300, 2006
  - 25) 西村甲, 前嶋啓孝, 荒浪暁彦, 他: 初診患者からみた慶応義塾大学病院漢方クリニックの特徴. *日東医誌*, 58, 867-870, 2007
  - 26) 寺澤捷年: 看護学に生かす漢方の知恵. *富山大学看護学会誌*, 8, 1-12, 2009
  - 27) 小川恵子: 作業療法を深める 漢方医学 漢方医学の考え方で患者さんをやる気にさせる. *作業療法ジャーナル*, 55, 171-175, 2021



# The Factors Affecting Nurse's Interests in Kampo Medicine

～What is Necessary to Spread Education of Kampo Medicine to Nurses?～

Junko Miyata<sup>1)2)</sup>, Nobuko Hashiguchi<sup>1)</sup>, Maki Kanaoka<sup>3)</sup>, Masami Hamada<sup>4)</sup>, Mosaburo Kainuma<sup>5)</sup>,  
Akiko Chishaki<sup>6)</sup>

*1) Department of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University*

*2) Department of Pediatric Surgery, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University*

*3) Department of Adult-Gerontological Nursing, School of Nursing Faculty of Medicine, University of Miyazaki*

*4) Fukuoka Nursing Association*

*5) Department of Japanese Oriental Medicine, Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences, University of Toyama*

*6) Department of Nursing, Graduate School of Nursing, Fukuoka Nursing College*

**Key Words:** Kampo medicine, Education, Nurse, Interest, Health-promoting

This study aimed to clarify the factors related to the level of interest of nurses in Kampo medicine. A survey was conducted between September to October 2014, using a questionnaire among all 1,203 nurses at the Hospital A in Fukuoka, Japan. The survey included four questions: (1) attributes, (2) present physical condition of nurses, (3) interest in and awareness of Kampo medicine, and (4) health-promoting lifestyle. The significance level was defined as a critical value of < 5%. The survey and valid response rate were 90% and 74%, respectively. The group with high level of interest in Kampo medicine had a greater number of subjective symptoms, were female dominated, had more work experience, worked in an outpatient department, held managerial positions, did not work night shifts, lived with family members, and had children. Multivariate logistic regression analysis revealed gender, years of experience, living together with family members, and interest level in Kampo medicine were correlated. Nurse's interest in Kampo medicine began from familiar things such as one's own and family's physical condition, and it is believed that interest would increase with work experience.